

「武士、お次は？」

森田沙彩

人物

隆之介（20）武士

久兵衛（18）隆之介の同僚

与力

写真家

○町奉行所・外観

広大な町屋敷が広がり、前を通行人が行き交う。

蝉が鳴いている。

○同・番所

通りに面した屋敷の中から、隆之介（20）と久兵衛（18）が並んで座卓の前に座り、見張りをしている。

隆之介が久兵衛の脇を、膝で突く。

顔を向ける、久兵衛。

隆之介は周りを見渡し、懷から懷中時計を取り出す。

隆之介「先日、やっと手に入れた懷中時計というものだ。海の方こうから来たそうだ」

久兵衛は覗き込む。

隆之介「あの坂本龍馬も欲しがっているらしい。いやー、入手するのに骨が折れた」

久兵衛「ほー。珍しい形をしている」

番所の前に与力が止まり咳払いをする。

久兵衛と隆之介は体を跳ね上げ、慌て表を向き、頭を下げる。

与力「お勤めご苦労。隆之介」

隆之介は顔を上げる。

隆之介「は」

与力「先日の騒動、先陣を切ってくれたお陰

で、すぐに収まった。良くやったな」

隆之介「恐れ入ります」

与力「さすが喜右衛門の息子だ。武芸で負け

知らずと聞いた。先が楽しみだな」

頭を下げる、隆之介。

与力が立ち去る。

久兵衛は笑顔で、隆之介の背中を叩く。

久兵衛「よかったな！出世も目の前だな」

隆之介「そんなことない」

久兵衛「あ、そうだ。ちょうどいい」

久兵衛は懷から写真を取り出す。

久兵衛「これを持てば更に、一目置かれるぞ」

隆之介「ん？何だ？」

久兵衛「写真、というものだ」

隆之介は写真を両手で受け取り、顔を近づける。

写真には、居間に背筋を伸ばし胡坐

で座る久兵衛。隣に三味線を持った

久兵衛の母。

隆之介「おお。噂には聞いた。すこい、ハッ

キリ分かるな」

久兵衛「だろ？ただ少しばかり魂を抜かれた」

隆之介は写真を放り投げ、勢いよく立

ち上がる。

隆之介「た、魂を抜く？」

その前を、荷物を持った女性が通りす

ぎながら、隆之介を見る。

咳払いをし、身なりを整える隆之介。

片手で座るよう促す、久兵衛。

隆之介は座り、周囲を見渡し、久兵

衛に顔を近づける。

隆之介「魂を抜かれて、よく生きているな」

久兵衛「問題ない。武士がこのぐらいで狼狽

えては務まらない」

咳払いをする、隆之介。

隆之介は、座卓に投げ捨てた写真を

指で引き寄せる。

久兵衛は含み笑いをし、

久兵衛「何だ、興味あるのか？」

写真を指で押し返す、隆之介。

隆之介「よく出来ているなと感心したまでだ」

久兵衛は腕を組みながら、

久兵衛「腰が引けたのかと思ったが」

隆之介は眉間に皺を寄せ、写真に手が

伸びるが、止まる。

喉の奥で笑う、久兵衛。

隆之介は久兵衛を睨み、写真を手に

とる。

隆之介「そんな訳あるか！一度試してみたい

ぐらいだ」

久兵衛「なら紹介しよう。そして是非、撮れ

た写真を見せてくれ」

写真を見ながら頷く、隆之介。

○ 隆之介の屋敷・外観（夜）

○ 同・隆之介の部屋（夜）

机に向かう隆之介の後ろ姿。

筆を持った隆之介の手元。

紙には『もし私の魂がすべて写真に取

られたら、後を頼む』と書かれてい

る。

紙を外包みに入れる。

表に『隆之介 遺書』の文字。

隆之介はため息をつき、引き出しに

しまう。

○ 同・玄関・外

写真家が三脚やバッグを持ち、額を手

拭いで拭きながら、頭を下げる。

隆之介は、片手で入るよう促す。

○ 同・庭先

写真家が三脚に、黒い箱に黒幕の付い

た写真機を乗せる。

その周りを扇子を口に当てながら、

前のめりで見る、隆之介。

隆之介「その箱を使うのか」

写真家「はい。銀板を入れて写します」

銀板を手にし、隆之介に見せる写真家。

のけぞる、隆之介。

写真家「この黒幕の中から姿を見るんです。

ご覧になりますか？」

黒幕をめくる、写真家。

後ずさりする、隆之介。

隆之介「遠慮しておこう。すぐ出来るのか？」

写真家「少しの間、動かないことをお願いし

ますが、仕上がりは目を見張るものです」

隆之介「確かに。久兵衛の写真は見事だった」

写真家「恐れ入ります」

隆之介は扇子を開け閉めしながら、

隆之介「うーん……噂に聞いたが……その」

首をかしげる写真家。

隆之介「あー、何でもない。早速はじめよう」



隆之介は椅子に座る。

写真家が黒幕をかぶり、フレームに銀

板を取り付ける。

フレームには、身なりを整える隆之

介の姿。

写真家「こちらの丸いガラスを見てください」

写真家はレンズを指さす。

隆之介はレンズを見るが肩をすくめ、

懐から取り出した手拭いで額をふく。

写真家「動かないで。綺麗に撮れないですよ」

硬直する、隆之介。

隆之介「な、何を取るんだ！体から何か引つ

こ抜くのか！？」

口を大きく開けた写真家が、

写真家「え、いや、綺麗に銀板に写らないん

ですよ。隆之介さんの姿が」

隆之介「あ、ああ」

肩の力を抜く、隆之介。

写真家「瞬きもしない方がいいのですが無理

ですし、体と頭は絶対に動かさないように」

隆之介「ああ」

写真家「では、はじめます」

写真家は黒幕から顔を出し片手を振る。

○同・居間

窓に吊られている風鈴が揺れる。

○同・庭先

蝉の鳴き声がする。

隆之介の額に汗が滲み、拭おうとする。

写真家「あ、動かないでくださいね」

動きを止める隆之介。

レンズを見るが、すぐに視線をそらし、

写真家を見る隆之介。

満面の笑みの写真家。

三脚の脇の開いたバッグを見る、隆

之介。

椿の花が入っている。

目を見開き、写真家を見る、隆之介。

満面の笑みの写真家。

目線をうろつかせ口を震わせる隆之介。

写真家「もう少しで撮り終えますよ。生き写

しのように、綺麗に！」

立ち上がる、隆之介。

写真家「あ」

写真家に大股で詰め寄る、隆之介。

隆之介「や、やはり、魂を抜き取っていた

な！」

胸倉を掴む、隆之介。

隆之介「知ってるぞ！写真を撮る代わりに魂

を抜かれると！」

隆之介は震える人指し指で黒幕を指さ

す。

隆之介「あの黒幕の中に、何か小細工がある

のだろう！」

口をポカンと開け肩を震わせる写真家。

写真家「それ、嘘です。これは光を使って銀

板に焼き写すんです。黒幕も余計な光を遮

るため。魂なんて取れません」

隆之介「じゃ、じゃあバッグの中の椿は」

バッグの中を見る写真家。

写真家「ああ。この後、女性を撮る予定でして。椿の花を持たせようかと。あ、武士には不吉でしたね、失礼」

隆之介「へ」

写真家の胸ぐらを離す、隆之介。

写真家は口元を隠すが、噴き出す。

隆之介は大きく咳払いをし、

隆之介「し、失礼した。もう一回撮ってくれ」

背筋を伸ばし身なりを整える。

○町奉行所・番所

見張りをする、隆之介と久兵衛。

含み笑いをした久兵衛が、隆之介の脇

を肘で突く。

久兵衛「で、どうだった？上手く撮れたか？」

隆之介は涼しい顔で懷から写真を取り出す。

久兵衛は手に取り、片眉を上げる。

久兵衛「お、おお。よく撮れている」

隆之介「久兵衛が紹介するだけあって腕がいない」

腕を組む、笑顔の隆之介。

○ 隆之介の屋敷・隆之介の部屋

くず籠の中には、くしゃくしゃになった遺書とブレた写真。

《了》